八色の森から　Origin

平成三十年度

奥只見レクリエーション都市公園
指定管理者　むつみグループ
藤　塚　治　義

すべてはここから始まった。

平成三十年三月に私は南魚沼市にひとつの提案をしました。それは市報に八色の森公園やその周辺の自然情報を紹介するものでした。

南魚沼市広報誌への投稿企画
「八色の森から」（仮称）

企画趣旨

八色の森公園及びその周辺の自然の情報を南魚沼市民の皆様に紹介する。

紹介にあたっての注意事項

イベント情報ではなく、あくまで自然情報を紹介する。

自然情報の中でも、身の回り、道路の脇や田圃など、気軽に歩けるような場所で見られるものや、誰でも名前を知っているような生き物に限定する。深山の中のもの（蘭や高山植物）などは紹介しない。

提案とともに二つの記事を見本として送りました。「カタクリ」と「ユキツバキ」でした。

四月のある日、南魚沼市の市報担当の方から市報五月一日号から記事を掲載しますので、原稿「ユキツバキ」を確認してくださいと依頼がありました。こうして『八色の森から』は、平成三十年五月一日号から連載が始まりました。

その後、年号は平成から令和へと変わり、令和三年四月一日号でまる三年となります。お陰さまで連載として続けることができました。読んでくださっている皆様に感謝しております。

市報に掲載される原稿はレイアウトの都合などで一部が変更されることがあります。この冊子では市報に掲載される前の元の原稿を紹介したいと思います。

著者紹介

藤塚（ふじつか） 治義（はるよし）

奥只見レクリエーション都市公園
指定管理者むつみグループ
公園管理事務所　所長

一級ビオトープ計画管理士・
技術士（総合技術監理部門・環境部門・建設部門）・
公園管理運営士

ユキツバキ

新潟県の木。庭木によくあるヤブツバキと違い、花びらが平になるくらいに開き、雄しべが黄色くバラバラである。名前に反し、寒さに弱く、凍害を受けやすい。そのため、冬の間、雪に被われる地域にのみ分布している。枝がよく撓り雪折れしにくい。

八色の森にも多数植栽されている。

（平成三〇年五月一日号）

ホタル

初夏の夜を彩るものといえば花火とホタルです。光るホタルでは、ゲンジボタルとヘイケボタルが有名ですが、両種はすんでいる場所が少し違います。ゲンジの幼虫は流れのあるところにすむ巻貝カワニナを食べて成長します。一方、ヘイケは田んぼの中など流れの弱い場所の巻貝タニシ等を食べます。そのため、ゲンジは小河川・用水路で多く、ヘイケは田んぼ・排水路で多く見られます。ホタルはきれいな川にいると言われますが、実は、山地渓流のような清冽な河川ではなく、田んぼの周辺にすむ虫です。まさに人里の代表的な虫と言えるでしょう。

ホタルが光るのは雄と雌が出会うためですが、オバボタルなど光らないホタルもいます。光らないホタルはフェロモンを使って雄と雌が出会います。

八色の森公園では園内よりも周辺の田んぼでホタルを見られますが、ホタルを見ようとしてハザードランプを点滅させると出会いを邪魔してしまいますので、野暮なことはやめましょう。

（平成三〇年六月一日号）

八色の森にもホタルがいることを知らない人が多くて残念です。

ハッチョウトンボ

十円玉にすっぽりと収まるサイズの日本で一番小さな赤トンボです。多くの県では絶滅危惧種に指定されていますが、幸いなことに新潟県では、減ってきてはいますが、絶滅の恐れまでは指摘されていません。

このトンボは小さいくせに非常に高い移動能力をもっています。おそらく本来は洪水や土砂崩れなどで生じた新しい湿地が主な生息環境であり、そのような場所を渡り歩いて生きているトンボではないかと思われます。

南魚沼では山際の放棄された水田のミズゴケ群落や背の低い湿性植物の群落などでしばしば見られます。「背の低い湿性植物群落」、すなわち近代化される前の田んぼが彼らにとっては重要な生息環境であったと思われます。農業の変化によって減少しているトンボの一種といえるでしょう。

八色の森では遊具の近くにある丸い湿原でしばしば観察されます。また、他の池にも現れることがあります。

写真のように腹部を立てて止まることが赤トンボの仲間の特徴です。雄は真っ赤になりますが、雌は黄色と黒の地味な縞模様です。

（平成三〇年七月一日号）

私は三用地区の圃場整備の関係で山崎新田のトンボ池の整備に関わりました。毎年、トンボ池でハッチョウトンボやいろいろな生き物を三用小学校の四年生に紹介していました。

南魚沼市の大和地区はハッチョウトンボが多いところだと思います。

アブラゼミ

新潟県では最も一般的なセミです。夏休みに網をもって追いかけた思い出のある方も多いのではないでしょうか。

八色の森では、アブラゼミ、ツクツクボウシ、ミンミンゼミ、ヒグラシなどのセミが見られます。（鳴き声はしますが、実際に見るのはなかなか難しいです。）

セミは一週間しか生きられないと言われますが、アブラゼミの成虫はもう少し長生きで、一ヶ月くらい生きていることもあるようです。しかし、成虫になるまで六年間地中で生きているのですから、このサイズの虫としては長生きと言えるのではないでしょうか。

羽化するアブラゼミの幼虫は、夕方地面からはい出してきて、近くの木に登ります。そして夜間に羽化します。幼虫の体から抜け出した白い体にしだいに色がついていき、小さく折り畳まれた翅がしだいに拡がっていく様子は非常に興味深いものです。

夏の夕方、ぜひ地面を歩くセミの幼虫や羽化を見に来てください。

ちなみに、セミの仲間は翅が透明なものが多く、アブラゼミのように茶色の翅をもつセミは珍しく、海外の昆虫マニアには人気があるとのことです。

（平成三〇年八月一日号）

アブラゼミの変尾

アブラゼミの羽化

セミは基本的に地中の生き物なので、除草剤などを使わない八色の森公園では安心して生きていけるのだろうと思います。初夏から夏の夕方に園内を歩いている羽化前の幼虫をみると、私が赴任するより前から公園に棲んでいたんだなあと感慨深いものがあります。

ススキ

化物の正体見たり枯尾花

江戸時代の俳人横井也有が書いた文章の一節ですが、「尾花」（おばな）というのはススキのことです。

ススキとよく似たオギ、ヨシなどの背のたかいイネ科の草は総称して「カヤ」（茅・萱）と言われます。稲藁は水を含むのに対し、カヤは水を弾くため屋根葺きに利用され、茅葺（かやぶき）と言われます。

ススキは乾燥した場所に生育します。一ヶ所からまとまって生えるため株状になります。それに対してヨシは湿地に生え、地下茎から新芽が伸びるため株状になりません。オギも地下茎から出ますがススキとヨシの中間くらいの湿地に生えます。

八色の森では冬の「どんど焼き」に備えて、安全や景観を邪魔しないカヤは刈らずに残してあります。

万葉集で山上憶良が「萩の花　尾花葛花　撫子の花　女郎花　また　藤袴　朝顔の花」と秋の七草を詠みました。ススキを含む前の三種は八色の森で見られますが、残りの四種は今では絶滅が危惧されています。昔と今は名前が違うので、みなさんは、それぞれ何の花かわかりますか？

（平成三〇年九月一日号）

ススキ

化物の正体見たり枯尾花

「尾花」（おばな）というのはススキのことです。

ススキとよく似たオギ、ヨシなどの背のたかいイネ科の草は総称して「カヤ」（茅・萱）と言われます。カヤは水を弾くため屋根葺きに利用され、茅葺（かやぶき）と言われます。

八色の森では冬の「どんど焼き」に備えて、一部のカヤは刈らずに残してあります。

ススキは秋の七草のひとつです。ススキ、クズ、ハギは八色の森でみられますが、残りの四種（カワラナデシコ、オミナエシ、フジバカマ、キキョウ）は今では絶滅が危惧されています。秋の三草では寂しいですよね。

（平成三〇年九月一日号）

※この月は長い原稿と短い原稿の両方を送りました。採用されたのは短いほうでした。

サケ

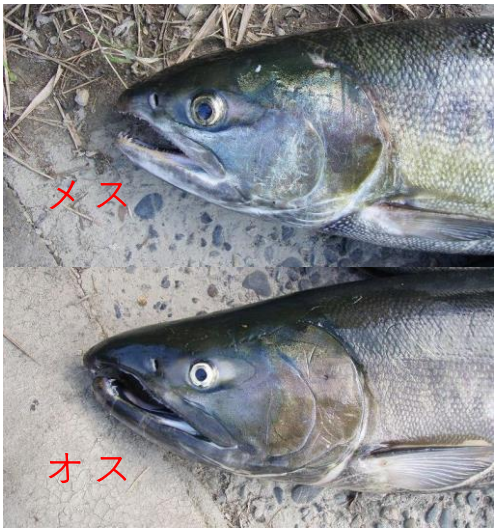
八色の森公園の中にはやって来ませんが、秋のサケは魚野川の特産です。現在は魚沼市にあるウライという施設で一括採捕されるので、採捕期間の終了後でないと南魚沼でサケを多数みることはできませんが、本来サケは魚野川の上流まで遡上します。

日本海から信濃川に入ったサケは新潟市街地、三条市などを通り抜け、大河津分水路から遡上してきたサケと合流し信濃川を遡上します。そして、長岡の妙見堰を越えたあと、そのほとんどが魚野川に入ります。

川に入ったサケは餌を取らず、ただひたすら繁殖のために上流を目指します。この時期にはオスは口先が大きく曲がり、赤い斑模様になります。

八色の森公園の中の資料館「むかしや」には、かつて魚野川で行われていた漁業の道具などの展示もありますので、ぜひ見学に来て下さい。

（平成三〇年一〇月一日号）



以前は南魚沼の魚野川にサケを縛って泳がせておいて、そこに集まってくるサケを捕獲するという漁（待ち受け漁）が行われていました。メスを囮にしたほうがオスを効率よく捕獲できたようです。私は密かに「美人局漁」と呼んでいました。

この写真は実は魚野川に入る前のサケを調査で捕獲したものです。サケは水産資源保護法で捕獲が厳しく規制されている魚です。県の条例で規制されている一般の魚よりも罰則が厳しく、勝手に捕まえたりすると逮捕されることもあります。

若い頃、サケに電波発信機をつけて信濃川を遡上するサケを追いかけたことがあります。サケは夜間も休まないので徹夜で川に受信機を向けてサケを探しました。大変でしたが、今となってはよい思い出です。

野菊

菊は秋の代表的な花です。野菊という種類の花があるわけではなく、小さな花をつけた野生の菊を総称して野菊といいます。

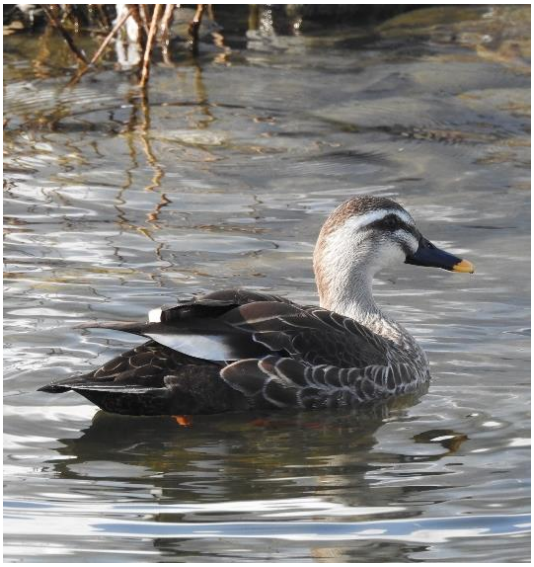
八色の森とその周辺では、ノコンギク、ユウガギク、ヨメナの仲間、ゴマナなどいろいろな種類の野菊が見られます。よく似ていますが花の色や実の形などが違うので区別できます。

野菊というと、伊藤左千夫の小説「野菊の墓」を思い出す人が多いと思います。作品の中でヒロイン民子は「・・・田舎風ではあったが、決して粗野ではなかった。可憐で優しくてそうして品格もあった。・・・どう見ても野菊の風だった」と書かれています。

いささか無粋ではありますが、野菊は種類によって分布や生育環境が異なりますので、ある研究者は民子の野菊をカントウヨメナかノコンギクではないかと推定しています。

まもなく野菊が霜枯れて、八色の森は冬を迎えます。

（平成三〇年一一月一日号）



カモ

カルガモとマガモは八色の森公園で一年中みられるカモですが（留鳥と言います）、カモ類の多くは越冬のために日本にくる渡り鳥です（冬鳥と言います）。そのため、冬になると八色の森公園の「光の池」と「自遊池」にはカモ類が増えて賑やかになります。

八色の森の池は浅いため、雪が積もると水面がなくなり、残念ながら、その時期はよその池に行ってしまいます。そのため、雪で池が埋まるまでの期間と、雪解けで水面が現れてからが八色の森のカモ類の観察シーズンです。

昨年から今年にかけて（2017-18）の冬は、カルガモ、マガモ、コガモ、キンクロハジロ、オシドリ、ミコアイサなどが見られました。さて、今年の冬はどんなカモたちに会えるでしょうか。なお、公園内に三羽いる白いカモはアヒルです。飼育しているものが逃げたものです。

（平成三〇年一二月一日号）

フィールドサイン（足跡）

八色の森に棲んでいる動物は、そのほとんどが夜行性のため、なかなか出会うことはできません。しかし、雪が積もると足跡が残ります。このように動物たちが残した行動の痕跡をフィールドサインといいます。

八色の森で見られる動物の足跡で、人間と犬を除くと一番多いのはタヌキとキツネ、次いでイタチです。ウサギの足跡もありますが、数は少ないです。

雪の上の足跡をたどるとキツネの狩りの跡や、タヌキが園外から公園にやってきて、園内を散歩した後、帰っていく様子など、公園も野生動物の行動の場となっていることがわかります。

八色の森では主要な遠路は除雪しています（積雪量によって除雪が追いつかない場合もあります）。散策ついでに雪の上の足跡をみて動物たちが何をしていたのか想像してみるのはいかがでしょうか。

（平成三一年一月一日号）

ニホンカモシカ

公園内に現れたことはまだありませんが、八色の森の周辺、大和地区の山際にはしばしばカモシカが現れます。南魚沼ではそれほど珍しいものではありませんが、カモシカは、トキやカワウソ等とともに特別天然記念物に指定されています。日本の固有種で世界的にも珍しく、パンダのお礼として中国に贈られたこともあります。

名前の由来ははっきりしませんが、シカの仲間ではなく、ウシの仲間です。角は分岐せず生え変わりません。群れで行動するシカと違い、主に単独で行動し縄張りを作ります。そのため一度見つけると同じ場所で見つけることが容易になります。

「カモシカのような足」という言葉がありますが、これはカモシカを漢字で「羚羊」とも書くことから、「レイヨウ」という動物と混同されたものと言われます。

夏場はなかなか見ることができませんが、冬になると雪上の足跡で意外と身近にいることがわかります。

（平成三一年二月一日号）

オシドリ

例年、冬の終わりが近づく頃、公園の池にオシドリが現れます。オシドリはミズナラなどの広葉樹林で繁殖するカモです。北日本で繁殖し、冬に南下する漂鳥（ひょうちょう）です。奥只見地域では夏に見かけることがあることから付近の山地で繁殖しているようです。餌はドングリなどの木の実を中心とした雑食性です。

オシドリの雄は特徴的な模様をしているため、すぐにわかると思います。特に「銀杏羽（いちょうばね）」と言われる体の両側に立てられた黄色い羽はオシドリのシンボルです。この羽がどこに付いているかは長らく謎でした。今は翼の一部（第一・三列風切）であることがわかっています。

俗に仲のいい夫婦をオシドリ夫婦などといいますが、実際のオシドリの雄は子育てを全く手伝わず、つがい相手も毎年かわると言われます。意外と小さなカモです。池に現れたら公園のFacebookなどでお知らせしますので、ぜひ見に来てください。

（平成三一年三月一日号）

オシドリはブナやミズナラの森で生活している鳥なのでまれに夏の山でみることがあります。奥只見湖の脇で真夏にメスのオシドリを見たことがあります。奥只見湖の周辺では繁殖しているのかもしれません。山形の横川ダム周辺で繁殖しているのは有名で、私も親子のオシドリを初夏に何回か見たことがあります。高木に並んで止まっているオシドリは冬とはかなり違った鳥に見えます。

オシドリの生態がかなり知られてきたため、オシドリ夫婦という言葉がうっかり使えなくなりました。でも、最近の離婚率の上昇をみると本当の「オシドリ夫婦」が増えているのかもしれませんね。